

第一〇章 宗教

第一節 下北の宗教

一 神社・寺院の組織と発展

組織持たない 現在の下北には、個々の家の神棚とか屋敷の中に祀られている神々のほかに、神宮が祭典に直
修験が主役 接かかわっている神社の数はきわめて多い。有格社だけで八七社あり、無格社を加えると一五
〇社以上になる。これらの神社は一〇人くらいの神官によって分担されており、最も多くの神社を受け持っている
神官は一人で四九社に及んでいる。

下北の神には一貫した組織や系統は見られない。一つ一つの集落の祖先神でもない。これらの神の中には英雄
神もあり、自然的なものもあるなど種類は雑多で、かつて修験あるいはそれに類似した人たちによって関東・
関東・東北の各地から下北へ持ち込まれたもの、海岸へ打ち上げられたもの、地域の人が拾ったり預かったりし
たもの、旅先から持ち帰ったもの、旅人や商人が下北に在住したときに祀っていたもの、古い神像を買い受けた
ものなど、さまざまである。

これらの事情は、神々の系譜に一貫性のないことを示すものであり、名称にしても、ある時期に付けられて後
に改名されたものが多く、神々の名称だけで下北住民の神信仰の組織を決めることは容易にはできない。

下北の神社組織の歴史の中には、明治の廃仏毀釈や神仏分離、昭和に発生した世界大戦中の神道運動など、いくつかの変動があった。そして最初の変動は、明治以前に行われていた神社の祭典を担っていた聖職者の体系を壊してしまった。明治以前に神々を祀っていた修験は神官となったり、普通人に還った。ここで組織的な神社管轄の再編成が行われた。現在の下北の神官は二、三の人たちを除いて、大半は修験から神官となった人々の子孫や縁者である。その他の修験は還俗し、修験に関する多くの資料は消滅した。

呪術的・宗教的行動は時間的条件や社会的人間関係・地域問題などの制約を受けるが、下北全域にわたって人々の信仰を集めているような強力な神や組織は、右のような事情で発展しなかった。そのため、一つの神への信仰が下北全域に広がって、下北の信仰を代表し制約しているという例を見つけることはできない。

現在、下北で最も大きな祭典を持っているのは、むつ市の田名部神社である。この神社の成立年代は不詳だが、宇都宮の二荒神社から分霊したものと伝えられている。紛失した鰐口（わにぐち）（神殿の前に掛け、吊るした綱で打ち鳴らす銅・鉄製の道具）には康永四年（一三四五）の銘があったといわれ、このころには既に存立していたものと考えられる。

祭神は味粗高比古根命・誉田別命である。神官の小笠原家は南部家とかかわりがあり、元和（一六八五〜九三）のころから始まったといわれている。この神社は、もと示現太郎大明神を祀り、田名部三四か村の総鎮守であり、この三四か村の代官所が田名部にできたのは寛永元年（一六二四）、田名部神社と改名されたのは明治九年（一八七六）である。明治まで一社を管轄した小笠原家は、神仏分離によって従来の修験が担当した三光院・大宝院・不動院などの東通村の社と、田名部地域の社を一手に引き受け、一挙に約五〇社を担当する下北最大の領分を持つことになった。

しかし、これら五〇社の中には田名部神社との本末関係はなく、またいくつかの神の間に同一系譜を見いだすことはできない。多くの場合、神信仰が基礎にあるわけではなく、神信仰の起源や動機は、その社会の生活条件や偶発的素因を含んでいるものと想像される。

現在、下北に修験は存在しない。しかし、下北における江戸時代の社会にあつて、修験は非常に大きな力を持ち、大きな働きをした。とりわけ田名部・目名(東通村)、大畑などには多くの修験、山伏がいたことが知られており、その数は三〇以上という。江戸時代には純粹の神官によつて治められていた神社はほとんどなく、仏教を主とした現世祈禱(げんぜきとう)の社が修験的な祈禱師によつて管轄されていた。それらの中で最も多くの社寺を担当していたのは田名部の大覚院の二九社、次が大宝院の一八社、そして目名の不動院の一一社などである。

彼ら修験の多くは熊野系と考えられているが、彼らが秩序整然とした組織を持っていたとする根拠はない。下北に至つた経路や系統も異なり、下北以外から入つてきたのか、あるいは初めから土着的傾向を伴つていたのかもしれない。しかし、ほかの地域と同様に明治の神仏分離以降、下北の修験は社会的にその機能を神官に、一部を寺院に手渡して宗教の世界から姿を消したのである。

寺院形成 神社と並んで成立宗教の代表的なものは仏教である。現在下北の寺院数は四三寺で、その内訳は**遅れた大間** 曹洞宗一五、浄土宗一三、浄土真宗七、日蓮宗二、法華宗四、真言宗一、時宗一となる。このほかに無住の庵寺一〇、「てらこ」約五、さらに観音堂と呼ばれるものや地藏堂があり、仏教に関する堂社すべてを数えると六〇近くになる。

神社と比べると数は少ないが、土着化は相当に根深いものがあり、宗派によつて多少の事情は異なるが、僧侶たちは下北以外の地域からここへ移住してきた。海岸部では開山となる行者的聖職者がそれぞれの港に上陸して

きて、庵や寺院を造っていったというものが多い。しかし、これらの寺院は開山一代で後継者を失い、無住となつて荒れ果てるか、旅僧の宿坊になつてしまふものもある。

これが一七、八世紀になつて下北の社会も安定を増してくると、寺院も組織化されていく。この時期は神社の創立も活発であつた。多くの寺院は田名部あるいは大畑を拠点とする二つの系統によつて組織化されていき、それぞれ別個に教化の領分を広げていった。無住の寺や宗派の不明な寺は各宗の寺院組織に加えられていった。そして、大畑の系統は田名部の系統に吸収されていった。田名部を中心とした寺院の組織化は、次第に下北全域に浸透した。寺院の形成が最も遅れたのは大間地域であり、ここでは一九〜二〇世紀にかけて寺院の形態を整えたものが多い。

下北の寺院に関して注目すべきことは、北通地域に「てらこ」と呼ばれる無住の堂屋が目立つことである。佐井村の原田から福浦に至る数か所の集落には「てらこ」と呼ばれる無住の堂がある。これらの堂は所属の寺院が決まつておらず、管理は集落の会長が行っている。中に祀られている仏像は宗派の教義に制約されず、観音や地藏であることが多い。雨天のときや農閑期には村のバサマたちがここに集まり、孫の守りをしながら針仕事や雑談で時を過ごす。

葬儀が行われる場合には、それぞれの宗派の僧侶をここへ招き、儀式を営む。このように「てらこ」は宗教的儀礼が行われる場であり、老人たちの憩いの場にもなっている。そこは、社会生活の中で重要な機能を果たしており、いわば公民館・保育所などの役割を含んだ集会所でもあり、死の儀礼における寺院としての役目を果たす場にもなっている。

この「てらこ」が宗派の僧侶や寺院の管轄下に入っていくと庵となり、その管理権は集落の会長から檀家の支

配下に移る。さらに、庵に資格のある僧侶が定住するようになると、その形態は寺院へと発展していく。このような寺院の成立は、最初から特定の宗派に属する寺院と異なり、寺院の中にその宗派と合致しない仏像を本尊として祀ったり、また脇侍^{わきじ}として諸仏の像が多く祀られたり、ときには竜神や弁天が祀られていたりすることもある。ちなみに、青森県内には古い仏像がきわめて少ない。その中で目につくものとして、むつ市常念寺の阿弥陀如来座像がある。平安時代の作とされ、元禄年間（一六八八～一七〇三）に京都の浄土宗本山から譲り受けたものといわれ、国の重要文化財に指定されている。仏像ではほかに、江戸時代の円空の作であるむつ市常楽寺の如来立像、佐井村長福寺の十一面観音立像があり、ともに県の重要文化財に指定されている。ついでながら円空は、恐山地蔵堂の仏像二体も刻み残している。

下北の仏像は、より自然的・庶民的な仏信仰と、組織的・系統的な寺院との交わりによって形成されているということがいえそうである。下北の庶民の仏教信仰には、短い歴史の中にも大きな変動はなかった。偉大な聖者や熱烈な信仰者が現れて、多くの改宗者や信徒を集めたという例もない。下北の仏教の中には、時代を画するような宗教による革命や改信も見られない。厳しい自然的な庶民生活の中で長く耐えてきた、地味な仏教としてのイメージが浮かんでくるばかりである。

二 恐山信仰

円仁が開基し 円仁（七九四～八六四）は諡号^{しごう}を慈寛大師といい、最澄の門に入り八三八年に入唐し密教を学んだ神秘の霊場 んで帰朝、延暦寺にあって天台密教の大成と興隆に尽くした名僧である。この円仁が唐の五台

山で修行中のある夜、夢の中に現れた聖僧からこう告げられた。

「日本の都の東方に、地獄のさまを呈ししかも万病に効のある温泉の湧き出でる霊山あり。帰国後はこの霊山を訪れ、地藏尊一体を刻して堂を建て、仏事に励むべし」

目覚めた円仁の周囲には香気が立ちこめ、机上に一巻の地藏経が置かれていた。

帰国後、教えに従って東北地方に霊場を求め、山野を巡り歩いて本州最北の地に至った。道に迷った円仁の前を、一羽の鵜うが魚をくわえて飛び去るのが見えた。近くに水があると察した円仁がさらに奥へ進むと、やがて満々と水をたたえた宇曾利山湖に出た。付近の荒涼たる光景はまさに地獄絵であり、かたわらで豊かに湧出する温泉は、お告げどおりの霊山に相違なかった。円仁は地藏尊一体を刻み、その中に持ち帰った地藏経一巻を納め、堂宇を建立して祀り、今日の恐山地蔵堂の基を開いた。時に貞観四年（八六二）、円仁入寂の二年前であり、これ

が恐山の由来である。

死霊を呼び 心身ともに完璧というほど安定した生活を送っている人はきわめて

出すイタコ 稀である。どんなに恵まれた環境にいる人でも、一片の不安さえ持

たない人はいないだろう。その不安が大きければ大きいほど、その不安から脱け出そうとするのも人の常である。その脱出方法として、古くから多くの人が試みてきたものが宗教への帰依であった。とりわけ病気や災厄からの脱出手段として人々が選び求めたのが、宗教であった。

そして、人々の不安・不幸を受け入れ、解決してくれる役割を担っていたのが、東北地方にあってはイタコ（巫女みこ）という名の民間宗教者たちであった。イタコと

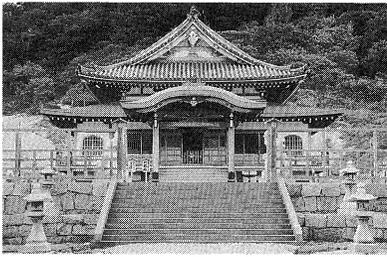


写真10-1 恐山地蔵堂

は、招魂・霊媒を業とする人たちのことで、盲目あるいは半盲目の女性である。古来よりイタコは、東北の民衆の生活にしつかりと根づいてきたものである。

師匠のイタコに弟子入りし、厳しい修行を積んだ上で許可をもらい、常人には及びもつかない能力を身に付けて一人前のイタコとなる。かつては営業を始めるために鑑札（免許状）が必要であったといい、津軽地方では弘前市新寺町の報恩寺のものが多く、近世においては報恩寺がイタコを統括していた名残とも考えられている。

イタコが行う巫女業には、死霊を呼び出して語らせる。「口寄せ」「仏降ろし」ともいう）、さまざまな神を呼び降ろして農作物の豊凶などの託宣を行う「神口」、病気お祓いや新築の家を祓う「祈禱」、そのほか種々の占いやなどがある。また、「オシラ様」という神を祭祀するのもイタコの役目であり、集落ごとに組織されているオシラ講と呼ばれ、祭文を語りながら手にしたオシラ様を振り（「オシラ遊ばせ」という）、集落の吉凶や作物の豊凶を占う。

依頼者がイタコの家を訪ねて口寄せなどをしてもらうほかに、イタコが神社の祭礼日などに出向いて行うこともある（イタコ待ち）。恐山の大祭、北津軽郡金木町の地藏講には多くのイタコが参集する。

死者が出た家では、三年以内に必ず歯骨を恐山に納めるといふ風習がある。下北一円では「死ねば恐山へ行くもの」と信じられているのである。

荒涼とした暗灰色の岩肌を硫黄の臭いが覆い、眠るようなエメラルド色の湖からは白い砂浜に風が舞う。地獄と極楽がまさにここにある。七月二十日から二十四日に行われる大祭と、十月九日から十一日までの秋詣りには、地元からはもちろんのこと、全国津々浦々から死者供養のために集まる善男善女で大変な賑わいとなる。祖先に香を手向け、回向の塔を積み、やがてイタコが両手を擦り合わせると、イラタカの数珠の音が辺りに響き、独特

な旋律に乗って口寄せが始まる。ある霊は生前の不徳を詫び、ある霊は残された者へ供養の礼を述べる。渾然一体となったイタコと霊の対話は聞く者の胸を打ち、心の中に生前の姿を思い起こさせ、涙を流すのである。

目的が異なる 霊場である宇曾利山湖の周辺には、本尊が安置されている地藏堂のほかにも本堂・慈覚大師堂・季節の祭典 薬師堂・延命地藏尊・千手観音・賽の河原地蔵堂などの堂宇が建てられており、血の池地獄・地獄谷・とうや地獄・修羅地獄・無限地獄・三途の川・極楽浜などが配されている。これらの管理は田名部の円通寺が行ってきた。

祭典は春・夏・秋の三回あり、各集落では春マイリ、夏マイリ、秋マイリと呼んでおり、それぞれに目的が異なっている。

春マイリは、豊作祈願の事前祝儀礼としての要素が濃い。雪が解けてから農繁期に入る前に、集落の各家から茶碗で集めた餅米と小豆で赤飯を炊き、これを背負って地藏様に供える。また田畑に春蒔きする種を持参して恐山で祈禱してもらうと、虫害を防いで豊作になるといふ。そして必ず恐山の和尚におみくじを引いてもらい、本年の世の中の情勢と穀物の吉凶を占い、各集落の一年間の様子を判断するのである。

夏マイリは死者の供養が目的である。個人参加の形で田名部口から登るが、交通の便のなかつた時代は老人には辛い徒歩であった。寺の山門で塵を払い、境内に入って指定された宿にわらじを脱ぐ。入浴して旅の汗を流し、仏の供養に卒塔婆を注文し、祈禱を済ませてから大寺へお詣りする。境内の各所にイタコがおり、参拝者は仏を降ろしてもらう。イタコが恐山に来るようになったのはさほど古いことではなく、明治初期からだといわれている。夜になると盛大な盆踊りが始まり、参拝者たちは踊りの輪に入って、昼間聞いた死者の声に流した涙も忘れ、夜更けまで踊り続けるのである。

秋マイリの目的は豊穰儀礼である。地域の人々は自分の田や畑で収穫した作物を持ち、水田農家では大きな鏡餅を持って供える。和尚に祈禱してもらった後、餅の下半分を持って帰り、小さく切って護符代わりとし、各家に配るのである。

生き続ける 下北地方ではオシラ様信仰が、土着化されなが

オシラ様信仰 からもまだ多くの集落で生きている。東通村の集

落の家では、毎年八月十四日にオシラ遊ばせを行い、翌十五日には口寄せをする。両日ともに集落のババさまたちが集まり、少ない人でも三口くちの仏様が降りてくる依り代よりしろである。依頼者が死者の

一升瓶に桃の木の枝を挿し、その枝に白い紙を結ぶ。これは仏様が降りてくる依り代よりしろである。依頼者が死者の年月日を告げると、イタコの口寄せが始まる。仏様の占いを書き留める書き役が傍らでメモし、ババさまに伝える。一口ごとに供えた水を取り替える。未婚のうちに死亡した仏はハナオロシといい、器の水の中に花を一輪入れて仏降ろしをする。

新仏のある家では必ず口寄せを依頼するが、死後一〇〇日を過ぎない仏様は仏降ろしできない。新しい仏の口寄せは百か日を過ぎた仏の供養と考えられているようである。



写真10-2 南家(現戸主南英克氏)に祀られるオシラ様

三 大間の信仰

漁師の心に宿 古くから漁業の村であった大間にとって、信仰の原型が「海の神」であったことは容易に想像できることである。

若狭屋の寺屋敷の網や、下手浜の大謀網に亀がかかったとき、村人はこの事件を祝い、亀に酒を飲ませた後、勇敢な若者が亀の背に乗り、「今度来るときは魚をいっぱい連れてきておくれ」との願いを込め、沖合いまで送って離してやった。材木では昭和の終わりごろ、小泊沖で捕れたオサガメを神社の小さな祠ほらに祀つてある。これらは祭事として残ってはいないが、こうした竜宮信仰は大間の漁師の心の中に、信仰の原型として生きている。

大間に弁天様が祀られるようになって以来「弁天島」の名が生まれ、漁船の目安であるとともに、漁師たちの心よりどころでもあった。重箱の手製の料理と御神酒を供え、敬虔けいけんな祈りを捧げる四月三日の大祭は、大古の人々の純粹な信仰そのものといえる。

金比羅様は新田家の氏神で今は稻荷神社の末社となっており、天妃様は伊藤家の氏神だったものが、今は稻荷神社に合祀されているが、ここでは東北・北海道地方で大間にしか祀られていない天妃様について触れておこう。

海難救助の女 漁村として古い時代から海を生活の場としてきた大間の人々は、豊富な海の幸に恵まれる一方、神・天妃信仰で、海の恐ろしさも人一倍知らされてきた。当然のこととして、海の神・船の守護神を崇め、厚い信仰心で多くの神々を祀ってきた。とりわけ「天妃様」として知られる中国の媽祖まそ信仰は古くから盛んであった。主として海難救助の神とされているが、後年になって、この世のあらゆる願い事をかなえてくれる現世利益の

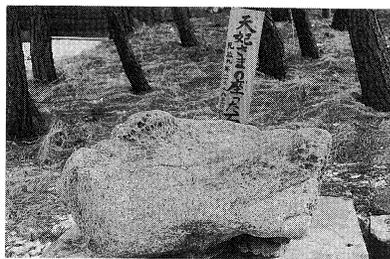


写真10-3 天妃様の座った石

神として深く広く信仰され、現在でも中国はじめ台湾、東南アジアなど世界的に信仰者を持っている。台湾の北港朝天宮が天妃様の総本山といわれ、文化大革命の後、信仰が自由になった中国では天妃廟が次々と復興している。

天妃様は九六〇年三月二十三日、中国の福建省興化府莆田県湄州島ほくせんで生まれ、九八七年九月九日、同地で二七歳の数奇な生涯を閉じた。四、五歳から天分が見られ、九歳で禅宗・般若教の中の金剛教を理解し、一五歳にして儒教・仏教・道教の經典を身に着けるといふ天才であった。一六歳から人間離れた力を発揮するようになり、特に遭難船の人命救助や妖怪退治に神力を見せ、自由に雲に乗り、むしろを敷いた海上を歩いたという。

この天妃様がいつどのような経路で大間へ来たか、正確な記録はない。しかし、九州の薩州（鹿児島県）野間半島から来たとする説と、水戸の那珂湊からとする二説がある。

菅江真澄の寛政五年（一七九三）三月二十三日、大間を訪れた江戸後期の紀行家菅江真澄が記した『大間天妃縁起』問天妃縁起が稻荷神社に保管されている。それによると、

みちのおく（陸奥）の国、糠陪ぬかのぼの郡といふ北部おくのうまき（牧場）の辺、大間の浦に天妃のかんやしろ（神社）あり。そのゆえをとへば元禄九年のころ、此浦のをさ（村長）伊藤五左衛門といふがここに祀る。という書き出しで、大要次のような話を紹介している。

いつのことであつたか、この浦（大間）の船、越前の船、もう一艘どこかの国の船が、大時化おほときけに遭つて難破寸前の危機にさらされた。このとき、大間と越前の船乗りたちが一心に天妃の神を念じたところ、暗雲の

中から天妃神が姿を現し、左右の手と口にくわえた三本の綱で船を曳き、救出しようとした。このとき、天妃様の姿を見た船乗りたちはさらに大きな声で天妃の名を呼ぶと、それに答えようとした天妃の口からくわえていた綱が離れてしまった。その一艘はたちまち激浪に吞まれて船乗りたちは海に消え、ひたすら天妃の加護を念じた大間と越前の船は危機を脱することができた。これ以来、船主（伊藤五左衛門）が天妃様を祝い祀ったものである。

そして年月日に「三河国秀雄」（真澄の的本名）と記名し、「天妃の祠に奉る」として、
 をる機はたのさをなくるまのいとま浪なみ

猶なほふなをさ（船長）や神の護もるらん

の歌で結んでいる。

大間に天妃を祀った伊藤五左衛門は、一五歳のときこの地に来て、船乗りから船主、そして村長の地位にまで登り詰めた薩摩男児であった。

天妃様は水 もう一つは水戸から来たという説である。盛岡の岩手県郷土資料館にある『御領分社堂』（一七戸から来た 五一〜五六年にかけて編集したもの）は、南部藩のすべての神社仏閣を調査した書物だが、これによると「大間の天妃様は水戸から来たもの」と書かれている。編集された時期が、菅江真澄の『大間天妃縁起』より四〇年ほど前というところに一層の信憑性しんぴやうせいが感じられるのだが、その経路に関する説明のないのが物足りない。推説として次のようなものがある。延宝五年（一六七七）、関羽かんうの子孫と称する心越しんえつぜんじ禪師が、中国から二体の天妃を持って長崎へやってきた。心越は中国曹洞宗の高僧だったが、当時の日本では同じ禅宗でも臨済宗が主力を占めていたため、心越は異宗からの訴えで長崎に幽閉された。その心越が水戸へ入ったのは、水戸光圀みつくたの招聘に



写真10-4 大間へ伝来以来300年、初めて公開された天妃様(平成8年)



写真10-5 遷座300年を祝い、台湾の総本山から贈られた天妃神

よるものであった。徳川御三家として北方の守りを担っていた光圀は、このころ日本に対して不穏な動きを見せ始めていたロシアを警戒し、快風丸という大きな船を建造させた。この快風丸が元禄元年（一六八八）に、常陸の那珂湊から松前まで調査にきており、この折に天妃の一体が大間へ来たものと思われる、というのが推論である。

このころ、干鮑や海參などの海産物を満載した大間の漁船は、津軽海峡を越えて那珂湊で一部の荷の陸揚げを行っていた。あとは水戸―江戸―長崎のコースであり、長崎からは清国へ俵物として輸出されていた。そして元禄五年（一六九二）三月、水戸光圀は那珂湊に磯浜天妃を祀っている。大間の船主だった伊藤五左衛門も大間―水戸―江戸―長崎のコースを往来し、那珂湊へ寄るたびに磯浜天妃神を詣ったかもしれない。大間と越前の漁船が遭難の危機を天妃に救助されたのは、四年後の元禄九年であった。この年が天妃様の大間へ遷座した年であり、それから九七年後に菅江真澄が『大間天妃縁起』を書いたのである。

第二節 神社と寺院

一 大間町の神社

修験者から 前節で紹介したとおり、下北における神社の数は多いが、江戸時代から純粋な神官によって治め
地元信仰へ られていた神社はほとんどない。神官に代わって修験者に管轄されていたが、その修験も明治の

初期までに全く姿を消してしまった。現在、大間町にある神社は五社である。

(一) 稲荷神社（大間）

現在地は大字大間字大間九三。

古くは幣帛供進へいぼくぐしんの指定神社で、大間字寺道九一番地にあり、百滝稲荷大明神と称した。祭神は蒼稲魂命あうがのたまひで八月十日を例祭日としているが、天妃神を合祀する以前は例年三月十日と七月十日であった（天妃神の大間遷座は元禄九年へ一六九六へ七月、大間村に天妃神大権現祠が建立されたのは享保十一年へ一七二六へ九月二十三日）。

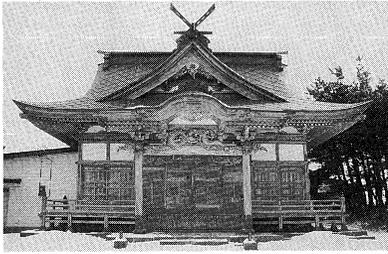


写真10-6 稲荷神社（大間）

享保十五年（一七三〇）七月、能登屋市左衛門の勸請、寛政六年（一七九四）には近隣の村と共同で神興を購入し、寛政九年に初めて行われた神興渡御は、当時の村長山崎弥兵衛、老名伝法屋久助、能登屋市左衛門、伊藤久右衛門らが勤めて莊嚴を極めたという。

享保十五年に社殿を改築、寛政五年にも修繕を加え、明治五年（一八七二）再び改築し、同十八年六月二十日に現在地へ奉還し、同二十二年二月二十二日、境内の地域を九二番地から九六番地にまで広げた。同四十二年四月二十日、再々度改築の上、奉還した。この間、明治初期の神仏分離令によって天妃様の扱いに困惑した伊藤家の子孫が明治六年、稻荷神社（享保十五年に新田Ⅱ能登屋Ⅱ市左衛門が宇迦乃御魂命を祀るために今の公民館前へ建立した）へいったん天妃神と金比羅神を合祀し、同十五年五月、現在地へ遷座した。その後も天妃神は船魂守護神として、広く地域の人たちの崇敬を集めている。

なお、当社を管理していた修験の和光院は、その後五代の相続があつて明治二年五月に神官となり、同六年三月に免ぜられて松林清記祠掌兼務となつた（『新撰陸奥国誌』）。

本社の祭神は蒼稻魂命に加え、天妃媽祖大権現、金比羅大権現、奥津島姫尊の三神を合祀している。

（二）春日神社（奥戸）

現在地は大字奥戸字焼畑五三。

本社はもともと現在のような郷社としてのものではなく、一廟堂としてかなり古くからあつたものと思われるが、その記録はない。『下北半嶋史』や『奥戸小郷土誌』などから推論すると、次のようになる。

寛永の初めごろ、奥戸と越後との商船の交流が盛んであつた。寛永十六年（一六三九）八月十七日、飛驒高山

から越後を経て十一面観世音を勧請し、若宮観音として現在地に廟堂を建立した。管理していた者は修験の金剛院で、貞享三年（一六八六）八月十五日に廟堂を御宮造りに新築し直した（昔は若宮観音を祀ったところから観音堂と唱え、神社とはいわなかった。慶応戊辰（一八六八）七月十五日、若宮観世音堂一字、金剛院榮尊が建立、との棟札が残っている」『新撰陸奥国誌』）。

享保二年（一七一七）三月、春日大明神（天児屋根命あめのこやねのみこと）を勧請し、現在地の下方に奉祀。文化十年（一八一三）八月十五日には奥戸若宮観音の正面下に稻荷の社が建立された。しかし文化十三年（一八一六）、若宮観音堂が全焼し、御神体と古記録を焼失した。

文政二年（一八一九）、長弘軒の鎮守田名部海辺三三番所の二二番十一面観音が、若宮観音と同じ十一面観音であったところから、これを勧請して新築再建し、下方にあった春日大明神を合祀した。しかし明治二年（一八六九）五月、神仏分離令によって春日大明神を祀ることにしたため、十一面観音を長弘軒に返し、春日神社となった。なお、土地の古老の話として次のような説があるので付記しておく。

本村には鎮守の神として春日神社が鎮座し、村民は毎年一回祈念祭を挙行していたが、その来歴については詳細を知る者はない。春日神社の前身は寛政年中に建てられた観音堂で、当時一七番の観音を祭っていたため、村民はこれを一七番の観音として崇拜し、明治維新に至った。しかし明治元年に社殿を新築するに当たり、従来の観音を廃して春日大明神を祀ることとし、以後春日神社として今日に至っている。

この説には、長弘軒からの十一面観音の話もなく、札所の番号も異なっており、真偽の判断は難しい。

本社は幣帛供進の指定神社で、祭神は天児屋根命、例祭は八月十七日である。大正六年（一九一七）五月、社殿の大改修が行われ、同年九月十七日に遷宮式を行った。

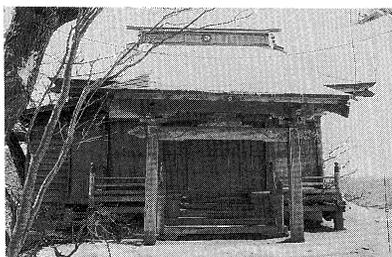


写真10-8 稲荷神社 (材木)



写真10-7 春日神社 (奥戸)

(三) 稲荷神社 (奥戸)

現在地は大字奥戸字焼畑五三。

幣帛供進のない神社で、境内は八七坪(約二八七平方メートル)。春日神社境内の中にあり、春日神社に向かって右側に建っている。文化十年(一八一三)八月十五日の勧請といわれ、祭神は蒼稻魂命、例祭日は九月十日とされているが、奥戸の老人たちは今も勧請日の毎月十五日に集まってお詣りしている。

(四) 稲荷神社 (材木)

現在地は大字奥戸字材木川目一七。

祭神は蒼稻魂命、例祭日は九月十日である。宝暦年間(一七五一―一六三)に作られた南部藩の『御領分社堂』によれば、既に材木稲荷宮の名が出ている。

(五) 弁天神社 (大間) ※第六章第三節「弁天島と灯台」、第一章第三節「伝説」参照。

現在地は大字大間字弁天三。

海の幸、船の守護神を崇拝していた大間の漁民たちによって建てられた多くの祠の一つが弁天祠である。鰐口に正徳五年(一七一五)八月の銘があるところから、二八〇年以上の歴史を持つものと思われる。大正六年(一九一七)、島に大間灯台を建設するため、祠の位置を四十八館の水難救済所の近くへ移したところ、村に天

変地異が続発したため、大正九年に再び島の北端へ戻し、異変が治まったという。終戦後の昭和二十八年（一九五三）、いか釣り船の遭難が続いたため、漁船から見やすい島の南側の現在地に移転し、同五十三年四月三日には四坪（約二三平方メートル）の本殿が落成し、今日に至っている。例祭日は四月三日。

(六) 春日弁天神社（大間）

現在地は大字大間字根田内八の四三〇。

元は細間崎にあった細間弁天祠を、細間港の築港工事のために根田内へ移転したもので、島の弁天神社の分祀である。弘化四年（一八四七）に書かれた『大間浦の記』によれば、「村の戌亥（西北）に細間の弁財天祠あり、このところニシン漁場なり……」とあり、細間崎は江戸時代、大間ニシンの漁場であった。

二 大間の寺院

町民が育ててきた仏教 寺院の歴史にもさほど古いものではなく、僧侶の大半は下北地域以外から当地へ移住してきた人達であった。それも開基した初代の住職一代で無住になったものがほとんどで、その後大畑を中心に組織化されていったものの、その寺院組織の形成が最も遅れたのは大間だという。

いずれにしても、全村民の熱烈な信仰を集めた寺院はなく、村民たちの地味で真摯な信仰心が自然発生的に、



写真10-9 春日弁天神社（大間）

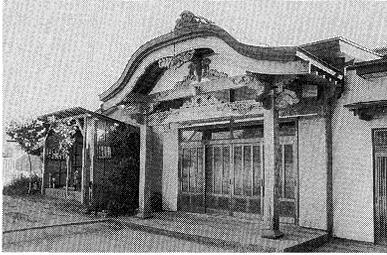


写真10-10 阿弥陀寺

土着の仏教を育ててきたといえよう。

(一) 無量山阿弥陀寺（浄土宗）

現在地は大字大間字寺道九七。

元禄元年（一六八八）に浄土宗阿弥陀寺庵として喜徹和尚が慈恩院殿菩提のために創立したものである。創立当時は佐井の発信寺の末庵として、普段は住職が不在であり、法事や葬式があると佐井から住職が出向してくるようになっていた。昭和四年（一九二九）四月二十九日、無量山阿弥陀寺と改称された。御本尊の阿弥陀如来は三〇〇年前に作られたものと伝えられている。古くから観音講が行われ、下北三三番巡礼札所二一番が本堂長縁の左端、堂型お厨子にある。三月に御忌会、八月にお盆と御施餓鬼会、十一月に御十夜会が行われる。

学制が発布された明治五年以前は、寛政年間（一七八九～一八〇二）より阿弥陀庵で寺小屋が開かれ、住職が子供たちに読み書きを教えていた。

なお、『新撰陸奥国誌』によると、開山の僧などが次のように紹介されている。

宝永二年（一七〇五）五月、武内伝兵衛が開基し、二世観山和尚の開山となっている。境内は三六〇坪（一一八八平方メートル）、本堂は東西に五間半（約一二メートル）、南北に五間（九メートル）。庫裡が東西二間（三・六メートル）、南北八間（二四・四メートル）。正徳四年（一七一四）正月に丈一尺八寸（五五センチ）、直径九寸（二七センチ）の半鐘が設置された。

総本山 知恩院（京都）

大本山 増上寺（東京）
本寺 発信寺（佐井）

(二) 大潤山福蔵寺（曹洞宗）

現在地は大潤大字大間字寺道九八。

宝曆四年（一七五四）に佐井村長福寺の八世水月萬江和尚により、地藏庵として開山。昭和十八年（一九三三）、長福寺九世法地和尚のとき福蔵寺に昇格した。その後、一世大活亮禪、二世活道亮順、三世義学蘇真、四世天真学明と続き、昭和五十一年、四世によって本堂・庫裡・山門が新築された。『大間浦の記』によると海岸巡拝一八番札所とある。また、北国霊場八八か所のうち六六番札所であり、現在は千葉県成田山不動講の大間支部になっている。境内には九州天草六六部住庵の石碑が建立されている。

平成三年（一九九一）七月、五世誠司住職により大間町内山に不動明王・薬師如来・普賢延命菩薩を本尊とする普賢院が、既存の不動堂・薬師堂の再建として建立された。普賢院に安置された不動明王は江戸後期の作、薬師如来は大正十年（一九二一）の作である。

本寺の御本尊は釈迦牟尼仏で、周囲にある地藏堂は弘化四年（一八四七）に安置された地藏菩薩を祀り、竜神堂は万延二年（一八六一）山形善宝寺の八大竜神を本尊としている。

三月十五、十六日に涅槃会、五月八日に釈迦誕生会、八月十六日に旧盆施餓鬼会、

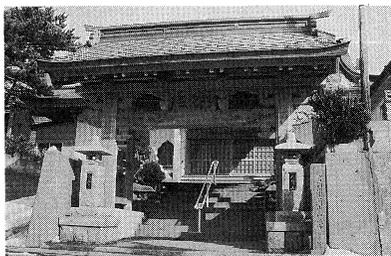


写真10-11 福蔵寺



写真10-12 法香寺

十二月七、八日に座禅会などが行われる。

本山 永平寺（福井県）・総持寺（神奈川県）
本寺 長福寺（佐井）

(三) 法香寺（真宗・大谷派）

現在地は大宇大間字大間一〇一。

大正九年（一九二〇）五月、佐井村法性寺ほつしやまじの一二代住職石沢寂良が、当時大間在住二三戸の檀信徒のために、法性寺付属大間説教場を開き、建立開基となる。その後大間教会と改め、石沢徹が初代住職となり、昭和六十一年（一九八六）十一月に現在の呼称となった。昔から世襲制が規則になっており、佐井村法性寺からの分寺とな

って三百余年の歴史がある。

御本尊は阿弥陀如来。寺宝として法性寺の経藏きやうぞうからお迎えした高さ約二〇センチの聖徳太子立像がある。製作年代は不明だが、その作風や色彩から推定して江戸初期か、それ以前のものと思われる。珍しいものとして、本願寺八世蓮如れんじよきじん上人の絵画伝記（巻物、掛軸四幅）がある。開基の寂良和尚が本山の命によって富山地方を布教巡回した際、信徒から贈られたものらしく、東北や北海道地方には見られない絵画伝記である。

本山 東本願寺（京都）
本寺 法性寺（佐井）

(四) 松尾山円融寺(日蓮宗)

現在地は大字大間字大間平二八。

大正のころ、函館市の一乗山実行寺、一七世松尾日融上人の祈禱は、その靈験の効あらたかなことで名をはせていた。当地でもその名声は大いに高まり、上人の祈禱を通して日蓮宗の教徒が増え、昭和二年(一九二七)に日蓮宗大間教会として開創された。その後、二世日成(松尾春海)上人の代の同二十二年、円融寺として寺号を公称し、同四十三年に三世日鵬(松尾融一)が住職となり、平成元年(一九八九)に現在の本堂を建立した。御本尊は大曼茶羅で、開祖日蓮の座像もある。寺宝として村雲尼公御所一〇世日栄上人のものと伝えられる袈裟がある。二月三日に節分追儺式、四月八日に鬼子母神祭、十一月十三日に御会式が行われる。

本山 身延山久遠寺(山梨)

本寺 一乗山実行寺(函館)

(五) 林清山信願寺(浄土宗)

現在地は大字奥戸字奥戸六九。

明暦二年(一六五六)五月、良専覚源和尚の開山である(『新撰陸奥国誌』)によれば、延宝元年(一六七三)覚源和尚の開山で、田名部常念寺の末寺浄土宗名越派、仏町の山田某の開基とある。また別に、奥戸の山田伊右衛門が延宝九年四月に建立したもので、本寺は岩手県盛岡市の大泉寺の末派であるという説、さらには貞享五年(一六八八)の開山説もあって、真実はわからない。



写真10-13 円融寺



写真10-14 信願寺

当時の奥戸には同宗派の崇徳寺という寺があり、戸数も少なかったが、そこに信願寺が建立された理由として、奥戸港が木材や海産物の積み出し港として栄えていたという背景があった。本堂に鎮座する岩船観音は、そのころの海運業者たちが寄進したものと思われ、寛永（一六二四～四四）ごろの港の繁盛ぶりがうがわれる。

現在も年に一回、多くの地元漁民が豊漁と海上安全を祈願する祭礼を続けている。御本尊は阿弥陀如来で、山門は明治二十四年（一八九一）の建立であり、一門の寺院の中でも格式が高い。昭和六十年（一九八五）八月に本堂・大広間・位牌堂・庫裡が建てられ、晋山式と落慶法要が盛大に営まれた。

一月五日に鏡直し（修正会）、同二十五日に法然上人忌日（御忌）、三月十四日に善導大師忌日（高祖忌）、同二十一日に彼岸会、五月八日に降誕会（釈迦生誕日）、水子供養、六月五日に節句、八月十五日に盆会、九月二十四日に彼岸会、十一月十三日に御十夜会などが行われる。

総本山 知恩院（京都）

大本寺 増上寺（東京）

(六) 梅香山崇徳寺（浄土宗）

現在地は大字奥戸字奥戸九三。

元和（一六一五～二四）から寛永（一六二四～四四）のころ、諸国行脚の途次に下北へ入った全眷閑徹和尚は、奥戸村に寺院がなく村民が困惑していることを知った。早速、盛岡市油町にある大泉寺を訪ね、住職の梅山上人

に相談。上人はこれに同意して南部藩へ請願した。藩でも快く堂宇建立の用材費用を寄進し、大泉寺の末寺として寛永二年、奥戸に崇徳寺が建立された。

明治四十二年（一九〇九）四月に outbreak して全焼したが、檀徒の網元岩泉米八が一四〇〇円余りの大金を喜捨し、同四十四年十月に再建した。そして昭和十八年（一九四三）四月、再び outbreak して全焼という災厄に遭い、代々継承されてきた宝物や古記録書をすべて失ってしまった。御本尊は阿弥陀如来である。

なお、本寺の境内には三七〇年の昔からこんこんと湧き出ているミネラルを含んだ自然水があり、人気を呼んでいる。

（本寺は貞享二年へ一六八五）八月に閑徹和尚が開基し、奥戸の伊勢屋安兵衛が建立。田名部町常念寺の末寺である、との説がある）

一月五日にお鏡直し、同二十五日に法然上人忌日、三月十四日に善導大師忌、三月二十一日ごろ春彼岸会、五月八日に釈迦隆誕会、六月五日に節句、八月十五日に施餓鬼会、九月二十四日ごろ秋彼岸会、十一月十二日に十夜会などが行われる。

本山 知恩院（京都）

本寺 大泉寺（盛岡）

(七) 海雲山長弘寺（曹洞宗）

現在地は大字奥戸字奥戸村一五七。

初めに長弘寺代々を見ると、次のようになっている。



写真10-15 崇徳寺

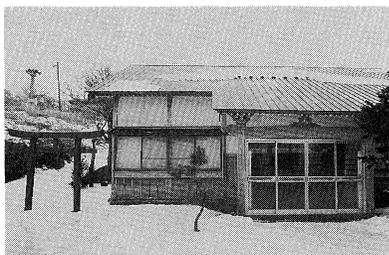


写真10-16 長弘寺

- 地藏堂守 全應金剛上座 延宝七年六月二十日寂
- 長弘庵開基（元祿三年）二世 岱巖高淳首座 元祿四年十月三十日寂
- 三世 峰山智玄首座 享保八年四月四日寂
- 四世 牧外泉牛上座 享保九年十一月十二日寂
- 長弘軒開山（宝永元年）本寺長福寺七世 辨山梅谷大和尚 享保九年八月七日寂
- 二世 德峰秀天庵主 延享三年九月二十四日寂
- 三世 寂真宗無庵主 明和八年十月二十二日寂
- 四世看司 直指見性比丘尼 享和三年九月二十九日寂
- 五世中興 長松天隣大和尚 文政四年八月十四日寂
- 六世前雲昌 梅林春芳大和尚 文久三年六月二十四日
- 七世 梵庭恵光座元 明治二十一年十二月二十一日寂
- 八世前全隆 龍山笑顔大和尚 明治三十七年九月六日寂
- 九世 大圓朴順和尚 昭和九年九月三日寂
- 一〇世重興 大英禪隨大和尚 昭和十九年十一月三日寂
- 一一世 泰学徳隣和尚 昭和三十年十一月二十三日寂
- 長弘寺開山（昭和四十一年十二月六日）本寺長福寺現住 大禪順一大和尚
- 二世法地開闢（昭和四十三年十二月五日）義峰靈泉大和尚

現在の寺は昭和十四年（一九三九）、大英禪隨大和尚の代に建てられたものだが、長弘寺に昇格したのは同四十年であり、長弘庵から一六世、長弘寺二世である現在の住職古畑靈泉大和尚が事実上の開山といつてよいだろう。

本堂玄関の左右には、密迹金剛みつせきこんごうと那羅延金剛ならえじんごうという二体の仁王像が立ち、尊い徳の成就を願っている。仏像安置所には、中央に御本尊の釈迦牟尼仏、右に文殊菩薩、左に普賢菩薩。右側に下北三三番巡礼札所の二二番十一面観音ほか二体、左側に聖観音ほか三体が祀られており、開山堂には中央に道元禪師、右に大元菩薩、左に達磨

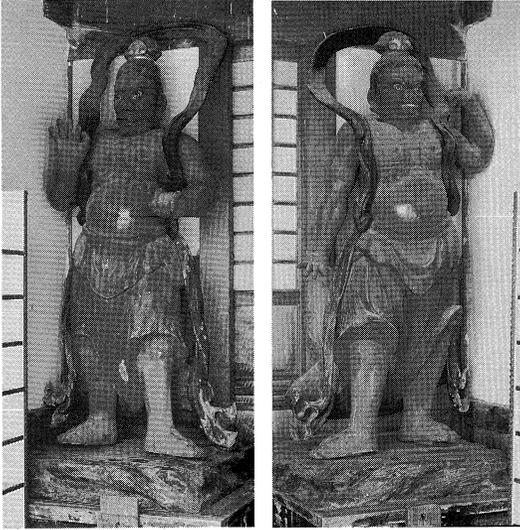


写真10-17 仁王像

大師が祀られ、堂の入り口に偉駄天、位牌の奥には地藏様が祀られている。その奥に三尊合祀所の金比羅堂があり、金比羅様と愛宕様と薬師如来が祀られており、諸仏像はすべて江戸時代のものである。また、普通の絵馬札とは異なる「船絵馬」の額が金比羅様に十数枚奉納されているが、これはかつての奥戸が通商漁港として栄えた名残の品と思われる。

一月一日～三日に修正会、二月十日に金比羅祭、三月十五日に涅槃会ねはんえ、同二十日に春彼岸会、五月八日に降誕会ごうたん（花まつり）、六月五日に節句会、八月十三～十六日に盂蘭盆会うらぼんえ、九月二十三日に秋彼岸会、十一月五日に達磨忌、十二月八日に成道会じょうどうえなどが行われる。

本山 永平寺（福井県）・総持寺（神奈川県）

本寺 長福寺（佐井）

(六) 松濤山法性寺奥戸分院（真宗・大谷派）

現在地は大字奥戸字小川代四。

松濤山法性寺の分院として昭和二十七年（一九五二）五月、檀徒により新築された。

本寺は境内五九六坪。古佐井新町西側にあり、天和三年癸亥（一六八三）九月の草創、開基は川原町能登某、開山は田名部徳玄寺二世専受という。東派徳玄寺下直宗である。

普段は住職が不在であり、法事や葬式があると佐井から住職が出向いてくることになっている。

本寺 法性寺（佐井）

